The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<Book Review> Advances in the Sign Language Development of Deaf Children, Edited by Brenda Schick, Marc Marschark, & Patricia Elizabeth Spencer, Oxford University Press.2006
Author(s)	湯川, 笑子; 佐々木, 倫子; 古石, 篤子 他
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2008, 4, p. 86-102
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25024
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

Advances in the Sign Language Development of Deaf Children

Edited by Brenda Schick, Marc Marschark, & Patricia Elizabeth Spencer, Oxford University Press. 2006

湯川笑子・佐々木倫子・古石篤子・武居渡・中村成子・
苅谷奈津江・田中瑞穂・阿部敬信（執筆順）

MHB研究会では、2007年2月と3月の2回にわけて、ろう者の言語教育に資する専門書の読書会を行った。そのうち、3月25日にMHB第13回研究会として読んだ *Advances in the sign language development of deaf children* (2006) は、日本では特に情報の少ない手話の発達について多くの論文が掲載されている新しい本である。そこで、比較的長めの書評を書くことで、会員への情報提供としようと考えた。書評はそれぞれの章を、基本的に2007年3月の読書会の際に読み手として内容をまとめ討論をリードした者が担当者としてまとめた。

【第1章】Understanding Sign Language Development of Deaf Children
by Marschark, M., Schick, B., & Spencer, Patricia E.

まず最初に著者らは、手話研究がまだ40年の歴史しかないこと、研究はろう者の助手などを使った聴者による場合が多く、研究対象の手話を母語として習得した人によらないことを指摘する。ろう者が使用していた何らかの手話に言及した記述はプラトンの昔にさかのぼることができるが、言語学的な分析の対象として見られることはつい最近までなかったとした上で、ろう児に対する言語教育を歴史的に概観している (pp.5-9)。18世紀にシャルル・ミシェル・ドレペが考案した音声言語に対応する手話 (methodical signs) の使用とその手話のガローデットによる採用・アメリカ輸入および衰退、一連の公民権運動と新しい種類の言語研究の成果として可能になった学校での手話使用、北米における人工のサインを用いた「混合」システム（“combined” systems）の失敗、手話と地域の音声言語のバイリンガル法の到来といった推移は類書でもよく知られているところである。（ちなみに著者らは、これらの方法の中で最も新しいバイリンガル法についても十分評価がおこなわれてはいないとする。）

次に、アメリカ手話（ASL）についての研究の歴史的な変化、向上の経過がまとめ

られている（p.10～）。単純な語彙のろう児-聴児比較研究から脱し、次第に母子の手話によるコミュニケーションに焦点がおかれるようになっており、そうした研究からは、子どもの手話発達の過程が聴者の音声言語発達と似ていることや、母子の意思疎通のためにフラストレーションが少ないことや、音声言語発達に無害なことなどが分かっている。11ページ以降では、今後必要な研究が指摘してある。95％のろう児が聴者の親のもとに生まれ、しかも聾学校の教師に手話力が必要要件として求められていない（アメリカ合衆国）中では、必然的に生じてくる手話能力の違い（variability）をふまえ、手話を親から学べない児童・生徒の言語を見るべきであるとする。また、視覚・聴覚と言語のモダリティの違いが、どのような発達上の差を生み出すのかも、ややもすると同質性を強調したくなる立場を横において正視すべきだとする。

この章は、手話使用の歴史、聾教育の歴史と、手話研究の成果と今後の課題といった大きなテーマを17ページとコンパクトに分かり易くまとめた論考である。手話の発達や教育言語としての価値についての研究が少ないことから研究ツールの見直しも含めて客観的に取りくむ必要性を説いた最後の4ページは特に実際なすべき研究への示唆に富んでいる。

（湯川　笑子）

【第2章】Issues of Linguistic Typology in the Study of Sign Language Development of Deaf Children

by Slobin, Dan I.

本章は、以下の二つの目的を持つ。

(1)聴児の言語間研究および話しことばの習得研究から得た知見の考察

(2)手話言語研究の言語類型論の枠組みへの位置づけの試み

著者は手話研究が比較的新しい分野であるために、かつてラテン語文法を英語などにあてはめたように、他の言語の知識を持ち込んでしまう可能性がある（p.21）と、指摘する。子どもの言語研究が、身近な言語の持ち込みから脱することの検証として、例えば、Slobin（1982）などの研究が挙げられる。子どもの言語習得は語順にたより、屈折はあとから学ぶといった仮説も、受動態は5歳まで困難ありとする仮説も、検証の結果証明できなかった。形態的、統語論的基盤だけの言語間の一般化はできないわけで、構造の出現度、談話機能にも留意する必要があることが示唆されている。

「持つ」に相当するような基本動詞に関して、ゼルタイ語で持ち方によって種々の動

詞が1.3歳から2.2歳で既に運用されていた例が挙げられ、ASL（アメリカ手話）とSLN（オランダ手話）の習得初期の研究でも同様の細分性が見られたとする。結局、ある特定の手話言語の発達に比較対照をする基準として話しことばを選ぶにあたっては、関連する類型的な範疇を選ぶことが重要である。そこで、習得のメカニズムから類型論が論じられるわけだが、子どもたちは個々の言語構造を学ぶのではなく、“類型論的(Slobin 1997)”運用をするとされる。接尾辞にしろ、意味的に細分化された動詞にしろ、接触が習得の道筋をつける（p.28）ので、ある言語からひとつの体系だけ（接頭辞、接尾辞、語順、一般動詞、等）を抜き出して、言語間の比較対照をすることはできない。各言語がそれぞれの“生態論的バランス”を示しているのである。手話の習得の調査研究において、話しことばの、形態統語、語彙、語用論の類型論的範疇の対照を取りあげて安易に一般化してはいけない（p.28）という警告を私たちは心すべきだと思う。

次に取りあげられるのは、文字化の原則である。ドイツ語、メキシコの現地語の例などで、客観的、中立的文字化などは存在しないことが示されるが、これは手話の文字化にもあてはまる。例えば、ASL（アメリカ手話）の手のひらを下に向けて、2本の指を交互に進める動きをどう文字化するか。もしこれを「$\text{WALK}_{\text{FORWARD}}$」と書けば、ASLに英語のWALKと同等の単語があるという誤解を与えてしまう。ここでは意義素に分解し、理論的中立、言語的中立を目指すことが重要で、そこで、著者はBerkeley文字化システム（BTS）を紹介している（http://www.Colorado.EDU/slhs/btsweb/）（p.32）。

文字化は手話言語研究を進める上できわめて重要な要因であり、日本手話においても、今後の検討が待たれるところである。 以上、2章は言語それぞれの生態論的バランス、文字化など、どれをとっても今後の研究推進のために留意すべき点が多々あることに改めて気づかせてくれる。

（佐々木　倫子）

【第3章】The Development of Gesture in Hearing and Deaf Children
by Volterra, V., Iverson, Jana M., & Castrataro, M.

本章では、聴児とろう児の言語発達における身振りの役割に関する近年の知見を5項目にわたって概観している。

(1)聴児で話しことばのみに接触する子どもの身振りの発達に関する知見の項では、

直示的身振りと表象的身振りの発達、幼児による音声と身振りのモダリティの同等の運用、2年間にわたる幼児の身振り発達の縦断的調査の報告などが紹介されている。

(2) 豊かな身振りインプットと接触する聴児の身振りの発達の項では、130の聴児家族調査から身振りコミュニケーションの強化体験が話しことばの発達の障害になることはないといった結論が導かれるなど、興味深い知見が紹介される。が、多くの人は、(3)以後の項目により強く関心を持つのではないか。

(3) 話しことばと手話に同時接触する聴児の事例（p.55）の研究では、口話の習得開始よりも早く手話の習得が起こるという説の紹介、そのために必要な初期の身振りと手話との区別、その難しさなどが論じられ、イタリア人コーダ、マルコの10か月から30か月までの手話と音声の産出調査（Capirci, Iverson, Montanari, & Volterra: 2002）が紹介される。LIS（イタリア手話）、イタリア語の話しことば、シムコム（口話と手話を同時に表出する）の3手段で育ったマルコが、聴児とは反対に表象的発話を直示的発話よりずっと多く表出したこと、手動モダリティの増加が表象的身振りの広範な使用を促したと思われること、マルコを含むすべての幼児が、身振り＋単語の組み合わせを、単語＋単語の組み合わせより早く発したこと、マルコの発話では、単語＋単語の組み合わせが、手話＋単語の組み合わせより早く出現したこと、20か月になるまでに、マルコは普通の聴児よりも多くの異なるモードの組み合わせを発したことなどが報告されている。ひとりのコーダの事例ではあるが観察結果は興味深い。

(4) 手話インプットのないろう児による身振りの使用に関しては、貧しい言語環境でも、通常の幼児と同じ発達、つまり、1語の指差し、または、1語の表象身振りから2語文へという道すじをたどったが、発達ペースは遅かったという報告がある（p.58）。その他、Goldin-Meadow ほかによるアメリカ人ろう児10人の2歳から5歳の縦断的調査、Pereira & De Lemos によるブラジル人ろう児3人の2歳から7歳の5年間調査、DeVilliers ほかによるアメリカ人ろう児2人の調査などが示されて、手話インプットのないろう児の身振りは、聴児のそれよりも複雑だが、手話、あるいは、聴児の話しことばよりも単純な形であることなど、経験知を裏付ける結論が引き出される。同時に、解明を待つ点も多いことが示唆される。

(5) 手話インプットと接触するろう児の身振り使用に関する報告では、話しことばを習得する聴児と手話を習得するろう児が、身振りについては同じ発達をたどること、サイナーは手話で話しているとき、手話発話とは別の要素として身振りを表出すること、手の動きに加えて、身振りも手話と共に表出され得るし、顔の動きも、特に物語りにおいて、感情や態度の情報を伝えること、これらの動きは文法的目的で用いられる表情表

示とは異なるものであることなどが報告されている（p.61）。また、口の動きは言語的機能を果たす一方、手話の表出に感情的強調や注釈を与えるために表出され得るという。

そして、手話との接触のないろう児のように、言語的インプットに制限のあるとき、身振りはコミュニケーションの主たる手段となって、ろう児が独自の身振りを創り出すという。それらは聴児の身振りよりも明らかに精巧なものであるが、手話の複雑さのレベルにははるかに及ばないというまとめを私たちは心を引き締めて受けとめるべきではないだろうか。インプットは身振り体系を形作り、特に、話しことば、あるいは、手話への変化の段階で重要な役割を果たすという。以上、きわめて示唆的な章であり、一読の価値がある。

（佐々木　倫子）

【第４章】Patterns and Effects of Language Input to Deaf Infants and Toddlers From Deaf and Hearing Mothers

by Spencer, Patricia E. & Harris, Margaret

人間には遺伝的に言語体系を発達させる能力があるのは確かだが、手話言語研究が明らかにしたことは、インプットの種類により言語発達が大きく左右されるということである。本章の目的は、どのような言語インプットがろう児（d）の手話言語の発達を促すのかについて、ろうの母親（D）と聴の母親（H）のそれぞれの場合について研究したものである（D、Hいずれの場合も手話を使用）。

音声言語の研究においては、母親の発話の文法的特徴は子どもの言語発達に直接影響は与えないが、発話の仕方には影響があることが明らかになっている。例えば、(1) 子どもとのやり取りが豊かな母親の場合には、言葉と具体的発話状況の結びつきが明らかに提示されるので子どもの言語発達は早く、(2) 頻度の大きい安定した語形の語は早く獲得されるというようなことが明らかである。ろう児に関して言えば、DとHの母親はその言語インプットの仕方が異なり、それがdの言語発達に影響を及ぼしているというのが本論の主張である。

dとコミュニケーションを打ち立てるには、まず子どもの視覚的注意を引きつけねばならないが、Dはその術を心得ており、子ども向けに発話を調節することも自然にできる。それに対して、Hにとって手話は母語ではないため、同じことを本能的に無意識に行うことは難しい。このことを述べた後、著者たちはまず「ろうの母親とろう児（Dd）」、

次に「聴の母親とろう児（Hd）」の場合について考察を進め、最後に「言語インプットと言語獲得・成長」について総合的に知見を披瀝している。

Dは子どもの注意を引くためにマルチ・モーダル（触覚、声、キネステティック）な方法をうまく用い、顔の表情もHより力強く多様で、手話単語と指示物との関連のさせ方もうまく、繰り返しも多い。また成人間の手話と異なり、Ddではそれほど複雑な統辞構造は使用されないため語彙形式も明確で獲得に適している。

これに対してHも身の回りの物や出来事について子どもの注意を引いて語るという点ではDと同じだが、手話発話のタイミングがうまくつかめないため、発話のうち子どもが受け取れるものの数がDより少ないという研究もある。またdの注意を引くために、HdはHh（聴の母親と聴児）より触覚を利用する割合は高いが、Ddよりは低いという事実や、HdはHhと同じくらい子どもに話しかけるが、手話発話はDdより少なく個人差も大きいという。（手話を学び使用する母親とそうでない母親とは明確に分かれる。）また、Hの手話発話は短く（一つか二つのサインのみ）、指示対象との結びつき力が弱いとか、不正確で一貫性がないとも言われる。このように不安定な手話インプットと量の少なさにより、Hdのこどもの手話獲得度合いは一般に下がることになる。

最後に言語獲得と成長に関しては、Hdの最もよくできる子どもの言語表現能力はDdやHhの中程度の子どもと同等レベルである。Hdの非言語的、社会精神面がDdと同等だとすれば、その言語的遅れは、Hの手話能力が制限されていること、そして他の成人の手話に触れることが少ないことが原因であると考えられる。

本章は、ろう児の9割以上が聴の親を持つ現実のなかで、Hの言語インプットのどこに問題があるのかを明らかにし、十分な言語インプットを与えることがいかに重要かを示している興味深い論考である。言語インプットの質と言語獲得の関係については更なる綿密な研究が必要とされるが、その成果は人間の言語獲得の本質に迫ると同時に、早期に聴覚障害が発見された場合の対処法にも役立てることができるだろう。

（古石　篤子）

【第5章】Acquiring a Visually Motivated Language: Evidence From Diverse Learners

by Schick, Brenda

本章は手話言語に特有な写像性という特徴が、手話言語獲得においてどのように影響を与えるかについて、様々な視点から検討したものである。手話言語は、言語の形式

からその意味を類推できるという点から写像的であるといわれてきた。この写像性という特徴は、単語レベルだけでなく、文法レベルにまで影響を与えている。例えば、手話動詞の運動の始点と終点が、主語と目的語にそれぞれ一致する「動詞の一致」や、表現したいものの形状や表現したいものを操作するときの手の動きなどによって手型がカテゴリカルに選択され、それに様々な運動が伴うことで述部を形成する「CL（類辞）」、話し手が複数の役割を演じる「ロールシフト」など、一見ジェスチャー的な要素を含む文法がある。これらの文法はジェスチャー的であるという点で視覚的に動機付けられている（visually motivated）といえる。本章では、これらの手話文法に含まれる写像性という特徴が手話言語発達に与える影響について、内外の手話獲得研究を整理している。この写像性が手話文法獲得を有利にしているかというと、そう単純ではないのである。例えば、主語や目的語が動詞の始点と終点に一致する手話動詞の屈折システムは、一見非常にジェスチャー的であり、音声言語の動詞の屈折システムより早く獲得されるように思える。しかし、手話動詞の屈折システムはおおよそ3歳程度で獲得されることが手話獲得研究からわかってきており、手話の写像性が手話動詞獲得に有利に働いているとは言いがたい。

Schickの結論は以下のとおりである。手話言語の発達において、手話の写像性が一概に子どもの手話獲得に影響を与えているというわけではない。一見、指さしや動詞の一致などジェスチャー的な要素を含むものについては、早く獲得されるように見えることがあるかもしれないが、これらが手話言語システムの中に取り込まれて、文法的なふるまいをするようになると、とくに音声言語に比して優位性があるとはいえない、というものである。

ここからは私見であるが、手話が言語であるということを強調するがあまり、これまで手話の言語性を否定することにつながりかねない写像性についての研究はタブー視されてきたという政治的な背景がある。手話が言語であることが社会的に常識となり、それに疑いを持つものがいなくなったからこそ、音声言語にはあまり見られない特徴について取り上げ、近年、検討されるようになってきたことは歓迎すべきことであろう。手話が音声言語と同等であるというだけでなく、視覚言語である手話言語の特徴を音声言語との相違点として明らかにしていくことも必要なのではないか。

（武居　渡）

【第6章】Lexical Development of Deaf Children Acquiring Signed Languages

by Anderson, Diane

この章は、ASL（アメリカ手話）とMCE（手指英語）における語彙の獲得について扱う。

まず、語彙獲得に影響する6要因が示される。その6要因とは、①ろう児の親が、聴者（95%）かろう者（5%）か、②ろう児の聴力損失の程度、③コミュニケーションのタイプ（ASL、MCE、音声英語、キュード・スピーチなど）、④ろうと診断された時の年齢（1999年までは平均して生後30か月）、⑤ろう児がASLまたはMCEの言語環境に置かれた時の年齢（今は早期診断により、誕生直後から言語環境の整備が可能）、⑥言語発達に影響する他の条件（知的障害など）の有無、である。以上の要因の不均一性が研究者にとってはやっかいな問題だ、と指摘する。

過去30年間の研究によって、ろう者の親をもつろう児におけるASLの獲得は聴児における英語の獲得とプロセスが同じであることが明らかになっているとし、語彙の獲得に関しても、語彙のサイズ、喃語の出現、初語の月齢、初語の内容、初期の語彙のカテゴリー別出現順、単語の組み合わせが始まる時期、について両者を比較研究した結果、やはり同じであるとの結論を得たとまとめている。

ASLは手話言語であるが、MCEはそうではなくて、ろう児に英語を教えるために考案された手指システムである。MCEにおける語彙のカテゴリー別出現に関する公的な調査研究はまだ行われていないため、今の段階で言えるのは、「生後6～12か月以内に診断されたろう児は、英語を獲得する聴児と同様に、MCEの語彙を身につけるようにみえる」ということだけだとしている。アメリカの聾学校の約75%がMCEを採用した（2003）が、MCEの有効性については議論があり、「ろう児にとってMCEは生きた“言語”ではない」とする研究者、教育者が多いという。結論として、われわれの知識は全く不十分で更なる研究が必要だと強調する。

この章から読み取れるのは、第一に、「ASLはろう児の母語になるが、MCEはならない」ということであり、第二に、MCEは1970年代から聴者の親をもつろう児のために使用されてきたが、「ろう児がMCEを通して英語をマスターした例は、まだ発表されていない」ということである。このことは、MCEに相当する手指日本語（日本語対応手話）を使用している日本の聾学校の教育法に対する警告ともなるであろう。

（中村 成子）

【第7章】Deaf Children Are Verb Attenders: Early Sign Vocabulary Development in Dutch Toddlers

by Hoiting, Nini

第7章では、オランダのろう児を対象にした調査プロジェクトについて書かれている。このプロジェクトのゴールはろう児の言語発達の診断ツールをデザインすること、ろう児と聞こえる親のかかわりのモデルをつくること、そして手話習得の研究であった。

まずオランダでの手話に関連する語をいくつかここに紹介する。オランダで自然発生した手話であるSLN（Sign Language of the Netherlands)、18Cに教育上の目的で作られた人工的な手話SSD（Sign Supported Dutch）などがある。ここでSLNは日本の場合だと日本手話、SSDは日本語対応手話にあたるものであるといえる。SSDは、1995年にバイリンガル教育が正式に導入されてからは、初期の言語訓練には使われなくなった。しかし、人工内耳の使用者が増えてまた注目を集めるようになった。

調査方法は、1年に2回訪問し、撮影したビデオをもとに文法の複雑さを見、ろう児の親が語彙のチェックリストにチェックするというもので、その際社会的報告や、心理的な面も考慮に入れた。また、多くの話し言葉の初期段階における語彙量を測るのに便利な道具であるとした（MacArthur Communicative Development Inventory）をSLN用に少し改良し、SLNの診断材料に、またlexical itemのカテゴリー分けに使った。グループを、ろう者の親とろう児の組み合わせでネイティブSLN inputを受けるグループ、スピーチと同時にSSDを習う聴者の親とろう児の組み合わせでスピーチと同時にSSDを習うグループ、聴者の親とろう児の組み合わせで、親がSLNを習ったグループの三つに分けた。

調査結果としては、聴者の親は、ろう児が間違った手話をしていても間違いに気づきにくい、まだSLNのインプットが不完全であるが、聴者の親を持つろう児でも親がSLNを使えば聴児と同じような初期の語彙の伸びがみられた。SSDを習う子も語彙を習得するが、SLNで語彙を習得する子よりもスピードが遅く、SSDで教えられた子も述部predicatesを比較的よく使うが、全体的な語彙の量や伸びの速さでは遅れが見られることから、SSDはすべての子どもが持ちうる言語能力を発揮させるのには十分ではない可能性が示された。また、手話を使う人は動詞に注目する傾向がある。多くの話し言葉の言語より手話は述部predicatesが多く、1歳8か月の子どもで語彙が50語以上のレベルの時、動詞は語彙の52％を占める。親によるチェックリストからだけでは見逃している点も大いにあるかもしれないが、MCDIは言語の種類別で見たときにあまり

一般的でない言語を分析する際にも有効であると分かった。

親がろう者であれば子は手話の習得に対して有利であることは容易に想像できたが、親が聴者であってもろう者の間で自然発生した言語であるSLNを使っていればインプットが不完全であってもろう児はSLNを伸ばしていくことができるというのは大変興味深いものであった。それに反し、オランダ語の語順に基づいて人工的に作られたSSDでは語彙の伸び悩みが見られるという結果から、日本手話と日本語対応手話で同様の調査が早急に行われる必要があると考える。

（苅谷　奈津江）

【第８章】Learning to Fingerspell Twice: Young Signing Children's Acquisition of Fingerspelling

by Padden, Carol A.

この章は、ろう児がどのようにして指文字を習得するかについて述べている。著者のパデン氏はろうの両親をもつろう者であり、ASLの母語話者で研究者で聴児の母親でもある。

最初に、ASLの指文字は「アルファベットを表わすための簡単な手指システム」ではなく、ASLの文法に組み込まれていること、指文字表現は「部分の合計」以上のものであり、単語それ自体の意味以上に豊かで象徴的な内容をもっていることが、具体例で説明される。

次に、指文字の学習は幼児の場合とASLを第二言語として学ぶ大人の場合とでは全く違っていて、前者は二種類の技術を含んでいる、と指摘する。第一の技術として、幼児は指文字で表わした単語を、まず一つのかたまりとして認識することを学び、英語の読み書きをするようになると、第二の技術として、指文字で表わした単語を「アルファベットの文字に対応するそれぞれの手形の組み合わせ」として理解し始める、という。

さらに、第一の技術については、指文字と読み書きは結びついていると思われがちだが、ろう児の場合両者が関連して発達するためには時間がかかる、と解説する。第二の技術は、頭の中で描く指文字表現の手形の連続を、英語の単語に結びつける技術であり、正しい綴りで書けるようになるためには、「正しい順番が大切」という自覚と、繰り返し練習することが必要だと述べる。ろう児はやがて指文字使用の技術を、読む技術へ、そして書く技術へと調整していくが、それぞれの技術の領域を楽に行き来できるようになるには何年もかかるという。指文字で表わした単語を英語で正しく書く力は、読

む力と関係している、とする。

著者は、就学前のろう児に対してもっと指文字を使うべきだと主張する。ろう者の親やろう者の教師は、サンドイッチ法（チェイン法ともいう。指文字で表わした後すぐにその単語を手話で定義する）を使うのだが、聴者の教師はこういうテクニックに気づかないので、教員養成コースで教える必要がある、としている。

この章の内容はASLの母語話者だからこその知見が多く、聴者に対して説得力がある。聾教育には手話言語の母語話者であるろう者教師が必要であること、そして、聴者教師だけによる聾教育はうまくいかないことを納得させる。

（中村 成子）

【第９章】The Form of Early Signs: Explaining Signing Children's Articulatory Development

by Meier, Richard P.

早期段階における手話発現では、手話の要素（手形、位置、動き）のうち、位置の誤りに比して手形の誤りの出現率が高い。正しい手形表現には微細運動ができることが条件になるからである。他の現象面も（例：前言語ジェスチャーから手話の初語へスムーズに移行する、子どもには手話の動きを近接化する－胴体に近いところで表す－傾向があるなど）手話言語と文化を超えて標準化された発達が関与しているようだ。手話発現に関する研究は、第一言語習得研究者の幅広い関心を引きつける。視覚－運動モダリティと聴覚－音声モダリティとでは、手話の語彙の方が写像的な形式－意味との関連性が高いが、最早期の手話の誤りは写像性に拠るものは少なく、乳幼児期の運動システムの制約によって説明されるものが多い。両方の言語モダリティにおいて、幼児は運動を繰り返す傾向があるという点が共通している一方で、胴体に近接化された動きや非利き手の動きの共鳴など視覚－運動モダリティに特化されるものもある。

手話話者コミュニティの状況は、心理言語学の面でも特徴的である。不幸なことに多くのろう児は、手話であっても話し言葉であっても従来の言語環境という意味で、非常に限定されているか皆無という状況におかれている。新しい運動技能の習得に伴う困難さとは異なる発達途上の運動システムの制限によってネイティブ・サイナーの子どもたちがおかす誤りについては、レイトラーナー（後期開始手話者）の子どもたちの手話の初語と比較研究をすることで解明できるだろう。ろう児の手話習得と成人聴者の手話習得の比較も有効であろう。Mirus他（2000）によると手話初心者の成人聴者には

胴体への運動の近接化が見られるということで、手話習得にこの運動傾向が関与している可能性がある。これまでの研究は、自然環境下の観察法によるものが殆どである。より条件を吟味し、子どもの母集団を大きくした実験的な取り組みが必要である。更に、異なる手話言語間での比較研究も必要である。

ろう児の保護者の約90％が聴者という状況下、手話発達の道筋や特徴を知る事は、保護者や支援者にとって乳幼児が表出する手話を正しく理解する力となる。乳幼児の手話の特徴を分析的にとらえる視点をもつ事で、家族・支援者は子どもの発達に見通しをもちながら、ろう児に関われるようになると考える。

（田中　瑞穂）

【第10章】 Acquisition of Syntax in Signed Languages
by Lillo-Martin, Diame & Chen Pichler, Deborah

本章は、手話によるシンタクスの発達を取り扱った論文である。著者らは、この研究の目的を、言語全般の性質についてモダリティの違う言語の視点から理論検証をするためだとしている。具体的には、音声言語をデータとして構築された理論を、アメリカ手話における「動詞の一致」と「語順」の習得を見ることで再検証し、もし違いがあれば、その理由を考えるとする。ちなみに手話動詞における一致とは、形容詞や動詞が呼応する主体の性、数、ジェンダーによって形を変えることをさす。（手話単語はモノシラブルだが、同時に、主語、目的語、動く主体の動き方、経路など複数の形態素を示すことができる。）

まず、写像性を有する手話単語における一致が対応する英語の一致（語尾変化）より早く習得されるかについては、写像性の影響はなく両者とも同じであるとしている。次に、動詞と一致させるべき主語、目的語などが目の前にあるか見えない存在であるかの差異は一致の習得に関わっており、後者の一致は前者より遅れて出現する。ただ、これについては、動詞の一致の認識はあるが、パフォーマンスができないだけだとする解釈もある（Lillo-Martin, 1991,1999）。さらに、一致の省略については、調査結果が分かれており、結論がでていないとする。つまり、音声言語の習得では、動詞の語尾変化が豊富で主語の省略が可能な言語の場合には、幼児は一致を省略して動詞の原形を使う時期がないとされているが、条件の似ている手話習得の場合には、そうした一致省略はよく見られるとする研究もある。研究結果の相違に加えて、手話を対象とした検証結果のゆれ（被験者間の差）は音声言語の被験者のゆれよりも大きく、ASL以外の

(例えば助動詞の) 他の手話による検証の必要性もあり、今後の研究が待たれる。

紙幅に限りがあるので、この章の後半に展開されている「語順」についてのまとめは省略するが、一致を扱った研究のレビューだけを見ても、言語類型が音声言語とは非常に異なる手話を対象に言語習得の過程を比較検討することが、人間の言語理解をさらに深めることを明確に表した章である。ただ、この章の研究の被験者はおそらくASLを母語として育つ幼児であり、聴者の親をもつ95%のろう児とは異なる「特殊な人口」を対象とした基礎研究であることを念頭におき、現実の多様な背景の児童・生徒の手話学習・習得とはまた別物であることを認識しておく必要がある。

(湯川　笑子)

【第11章】How Faces Come to Serve Grammar: The Development of Nonmanual Morphology in American Sign Language

by Reilly, Judy

本章は、手話の非手指動作(表情など)の獲得研究の第一人者であるJudy Reillyによって書かれた章である。アメリカ手話において表情の役割は大きく3つある。第一に、特定の語彙に伴う非手指動作であり、例えば{SEARCH}という手話単語に、頭や目を動かして探す表情が共起するというものである。これは、手話と非手指信号が同じ意味を表している例である。第二に、副詞的な意味を付加する非手指動作である。{BOY WRITE LETTER}という手話単語に、舌を出す表情が伴うことで「少年は注意を払わずに手紙を書く」という意味を表す。この「注意を払わずに」という副詞の部分が表情によって表されている。第三に、文法的な役割を果たすものである。WH疑問やYes-No疑問、否定、条件節など文法的な意味を非手指動作によって表す。

なお、これらの表情と情動的な表情とは区別されるべきであるともいわれている。上記の非手指動作はすべて言語的な表情であるといえる。それに対し、情動的な表情というものがある。両者の違いは、前者は表情の変化が急に始まり急に終わるという特徴を有しているが、後者は緩やかに表情が変化し、緩やかに表情が終わっていくというものである。

この章では、言語的な表情をはじめとする手話の非手指動作の獲得について詳細に書かれている。その一つ一つを取り上げることはできないが、手話獲得における非手指動作の発達についてはおおよそ以下のプロセスをたどる。まず、手話1語文段階では、手話と表情は不可分のものであり、手話と表情が1つのパッケージになっている。その

後、手話が一線上に配列され、多語文が表出されるようになるが、早期に獲得した表情がその後文法的なふるまいをするようになるわけではない。表情というのはそもそも情動的なものであるが、この生得的な情動的表情を言語システムの中に取り込み、体系的に再構成していくプロセスが、まさに手話言語における非手指動作の獲得のプロセスになっていく。手話獲得において、まず子どもは語を線上につなげて発話するようになり、疑問や条件節、否定、副詞的意味の付加など、手で表現することでこれらの意味を表そうとする。その後、手話と表情について独立的に分析が可能になると、手話と表情が共起するようになり、手話と表情という異なるチャンネルが統合されて、発話を構成するようになってくると考えられる。

手話文法獲得研究の中で非手指動作について扱ったものはきわめて少ない。それは、他の文法と違って、非手指動作の場合、表出されるものがアナログであるため記述方法が難しく、体系的に分析することが困難であるからだと考えられる。そのような非手指動作の獲得について、これだけ丁寧に記述し、そのプロセスを明らかにした本研究は大変貴重であり、得られる示唆も多いと考えられる。

（武居　渡）

【第12章】Deaf Children's Acquisition of Modal Terms

by Shaffer, Barbara

本章では、手話におけるモダリティの獲得研究をレビューしている。ここでいうモダリティとは、「法性」や「陳述」とも訳され、文が指す内容や聞き手に対する話し手の判断や心的態度を言う。手話獲得過程においてモダリティを表す表現の発達を、心の理論や認知発達と関係付けながら論じている。ここでは、文の動作主についての話し手の心的態度を表示する動作主志向モダリティ（John must go to the doctor.）と文の命題についての話し手の信念を表す認識モダリティ（John could be at the doctor.）の二つのモダリティについて中心に見ていく。

アメリカ手話においてモダリティは主に単語として表わされることが多い。ただし、モダリティの表示には、単語に加えて表情などの非手指動作が伴うことも多く、特に話し手の信念を表す際に非手指動作がよく使われる。手話のモダリティの獲得について体系的に分析した研究はないが、本章著者のShafferが両親ろうのろう児1名を3歳10か月から5歳7か月まで縦断的にビデオ収録した資料の分析を行っている。3歳11か月時に、対象ろう児に動作主志向モダリティを含んだ表現が観察された。その後、4歳2

か月時には、動作主志向モダリティだけでなく、認識モダリティを含む表現もみられるようになり、手話表現の中に話し手の信念や心的態度を反映した幅広い表現が観察されるようになった。5歳になるとモダリティ表現に非手指動作を用いるようになったという。なお、手話のモダリティの獲得過程については、音声言語獲得過程におけるモダリティの発達の傾向ときわめて類似していることを指摘している。

手話のモダリティについてこれだけ体系的に書かれた著作は、今までなかったものと思われる。手話研究の先進国であるアメリカでさえモダリティの獲得についてはほとんど明らかにされてこなかった。まして日本では、手話のモダリティの研究については皆無であるといってよい。モダリティ研究は、発達心理学や心の理論など心理学分野と共通項を持つ領域であるといえる。日本手話のモダリティとその獲得について、今後の研究が心理学と言語学の共同作業の中で明らかにしていくことが望まれる。

(武居　渡)

【第13章】The Development of Narrative Skills in British Sign Language
by Morgan, Gary

第13章は、Gary Morgan著の、語りの発達を取り扱っている。「語り(narrative)」が出来るためには、文単位の言語知識の他に、語用論的知識と、多くの情報を処理するためのワーキングメモリーや処理能力が必要である。そこで、この研究では語りの発達を見る2つの語用論的側面、つまり指示(reference)と、まとまりの配列(sequencing of episodes)の習得をさぐる。

指示の方法として、英国手話(BSL)では、名詞を直接繰り返すことの他に、分類辞(semantic classifiers, サイズや形などの意味論的差異をもとにカテゴリー化した形態素や単語)、およびロールシフトあるいは指示シフト(role shift, referential shift, 話の中の登場人物ー動物ー本人からの発話として語る説明、思い)がある。11人の4歳3か月から13歳4か月の子どものfrog storyに語りのデータ(手話の母語話者である成人二人の)データを制御群データとして使用pp.325-327)によれば、被験者のデータには分類辞は出現するが、10歳以下の子どもについてはその機能を効果的に使っておらず、ロールシフトについても、同じで6歳以下のグループは初出の登場人物に使用するなど、成人は使用しない用法が見られ、語りの披指示体が不明確な未熟さがうかがえる。

次に、まとまりの配列(sequencing of episodes)、つまり、大きな筋がき(plot)

と小さなエピソードが区別でき、両方語れるかどうか、例えば犬と子どもが同時に別の行動をしているような場面を、whileなどを使って表現できるかどうかについては、著者によれば、4-6歳児は、同時性をあらわそうとはせず（順番に起こったこととして表す）、7歳児は、同じシーンに2者の登場者があることは言及できるものの、動作を示すことができない。これができるようになるのは13歳だとする。

著者は、バイリンガル法に期待する者にとって特に気になる、転用（transfer）の有無については、実証研究が少なく不明の部分が多いとする。すでにMHB研究創刊号（2005）では、神岡瑞恵氏による語りの論考（手話と作文による語りの比較研究 pp.67-84）が掲載されており、Morganが必要性をとく転用研究の路線上に位置する貴重な試みである。ただ、第1章での指摘の例にもれず、被験者は聴者を親にもつ児童で、母語としての手話から作文への転用といった明確な関係を前提とはできない。また方法論的にも手話での語りを日本語に文字化する方法面で解決せねばならない課題が多い。談話レベルで言語産出を分析した研究が少ない中で、この章が研究方法論的に示唆するところは多い。

（湯川　笑子）

【第14章】Natural Signed Language Acquisition Within the Social Context of the Classroom

by Singleton, Jenny L. & Morgan, Dianne D.

本章の目的は，家庭における養育者とろう幼児、及び、教室における教師とろう児童生徒の相互作用を検討してきた研究をレビューし，社会文化アプローチの立場からの考察によって，バイリンガルで，バイカルチュラルなろう児のアイデンティティの発達をガイドし促進していくために効果的なコミュニケーション・ストラテジーを用いるろうの教育者という新たなコンセプトに基づいた教育観を提案することにあった。例えば，聾学校における教室談話研究については，1980年代から1990年代までは，治療教育的な視点の研究が多かったが，近年は，教室での教授や学習過程を分析することで，どのような知識の構築が起こっているのかを明らかにしようとする教室談話分析が行われるようになっているとしている。また，手話言語によって文脈化された教室談話の分析を行うことで，視覚的かつ言語的なストラテジーを明らかにして，聾学校の教室内における教授学習過程の研究も行われるようになったとしている。

このように，本論文は，社会文化アプローチという立場からレビューを進め，ろう児

の発達と成長はバイリンガル・バイカルチュラルコミュニティの正統的周辺参加から始まるとし，手話の母語話者であり，ろうアイデンティティを持っている成人ろう者がコミュニティのエキスパートとして果たす役割について高い評価を与えている。従来の手話による聾教育関連のレビューは，二分論的な方法論の効果の検証やイデオロギーの主張に終始しがちであったが，本論文は新たな視点から大人とろうの子どもの間に実際にどのような相互作用が起こっているのかを問い直したという点で意義あるものと言える。

実際，筆者も日本のバイリンガル・アプローチをとる聾教育機関において書きことばの指導場面を取り上げ，教室談話分析を用いた研究を行った。その結果，日本手話母語話者である指導者は，視線や指さしといった日本手話の視覚的な言語的ストラテジーを頻繁に使うことで安定した教室談話を維持し，その上で，チェイニング（Padden & Ramsey，2000）といった指導テクニックを駆使して日本語の授業を行っていた。日本語指導というと，日本語に関わる語彙や文法，運用の知識理解だけを指導しているように思われるが，それだけでなく，手話と日本語の関係性や手話によって日本語にどのようにアプローチするのかといった日本語社会に生きる言語的マイノリティとして生きる術を学んでいるといった新たな視点を学ぶことができた。筆者自身も本論文の意義を実感できたところである。

（阿部　敬信）